Title	F.-J. Brüggemeier/Th. Rommelspacher (Hrsg.) : Besiegte Natur. Geschichte der Umwelt im 19. und 20. Jahrhundert
Sub Title	征服された自然 : 19, 20世紀における環境の歴史
Author	矢野, 久
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1991
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.84, No.2 (1991. 7) ,p.527(305)- 531(309)
JaLC DOI	10.14991/001.19910701-0305
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19910701-0305

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書 評

F.-J. Brüggemeier/Th. Rommelspacher
(Hrsg.): *Besiegte Natur. Geschichte der
Umwelt im 19. und 20. Jahrhundert*
(München 1989 (1987¹)) (『征服された自然—
19, 20世紀における環境の歴史—』)

西ドイツの歴史学の発展においてまず第一に注目されるのは、「歴史的社会科学」としての「社会構造史」であろう。1960年代後半以降の西ドイツの批判的風潮の中で、社会構造史は、ドイツの過去を批判的に考察する歴史学として、ナチズムに至るドイツ史の特殊性を経済的近代化と政治的近代化の構造的なズレによるものとして捉えた。政治的観点からみれば、それは、戦後のボン民主主義の批判的超克であり、社会民主主義的な社会的国家の追求であった。こうした方向性は、1970年代になって政治の領域での社会民主主義政権の誕生として、歴史学界内部でいえば、雑誌『歴史と社会』の発刊などに表されているような安定した地歩の形成として具現化される。

しかし1970年代後半以降、政治の領域では、社会民主主義的な社会的国家が実際には自然環境を破壊し、核エネルギーを推進する国家主体以外の何物でもない、と主張する運動が涌出した。その運動は、「緑の党」としてわが国においても知られている反核・自然＝環境保護運動である。間接的ではあるが、この緑の党運動を政治的背景にして、歴史学内部では新しい潮流が生じてきた。それは、これまでの社会構造史が、歴史の過程と構造を強調するあまり、歴史における人間の主体的経験を軽視・無視してきたことを問題視する歴史学で、「下からの社会史」あるいは「日常史」と呼ばれている。

しかし、わが国でも西ドイツでも、〈社会構造史〉対〈日常史〉の対立的図式が歴史学方法

論の観点からのみ評価されたきらいがある。それゆえ、日常史については、方法論的に人間の主体的経験の場、つまり労働の場と生活の場がどのように歴史分析の対象となっているのかが問題とされている。それに対し、日常史の政治的、社会史的背景としての反核・自然＝環境保護運動が求める「自然」は、こうした歴史学方法論上の論争においては脇におしやられてしまったばかりか、独自の研究対象とはされてこなかったように思われる。

1980年代後半に至ってようやく自然＝環境の歴史が独自の研究対象としてテーマ化されてきた。ここで取り上げる本書は、西ドイツの「下からの社会史」の世代によるものである。編者の一人である Brüggemeier は、19世紀のルール鉱山労働者の労働と生活をテーマに実証的歴史研究をおこない、歴史学方法論的には社会構造史に対して下からの社会史を主張した若手歴史家である。その意味でも本書は、下からの社会史が自然＝環境の歴史にどのように接近しようとしているのかをみるうえで興味ある対象となろう。自然＝環境においても、歴史学方法論上画期的な見方が呈示されているであろうか。

本書は、プロジェクト「高度産業化時代における工学上のリスク知覚」の一環としてフォルクス・ヴァーゲン財団の援助を受けた、1986年12月にブレーメンで開催された研究大会での報告を集めたものである。本書のテーマは「工業化による自然と環境の変化」であり、時期的には19世紀と20世紀前半を対象としている。全体で8つの論文から構成されているが、執筆者とタイトルは以下のごとくである。

- 1) Siefert 「エネルギー」
- 2) Rommelspacher 「水の汚染に対する自然の権利」
- 3) Andersen/Brüggemeier 「ガス、煤煙、酸性雨」
- 4) Schramm 「土壌の環境史に寄せて」
- 5) Sachs 「自動車社会—一つのユートピアの興隆と衰退—」

6) Machtan/Ott「健康のリスクとしての就業労働—危険な問題との歴史的なかわり—」

7) Andersen「郷土色保存運動—ブルジョワ的自然保護運動—」

8) Zimmer「社会的遍歴—プロレタリアによる自然の獲得—」

以上の8つの論文をテーマ別に類型化すると、大きくわけて、〔I〕水、大気、土壌という自然=環境の汚染の歴史、〔II〕労働者にとって直接的な環境としての労働環境、〔III〕自然=環境保護運動から成り、さらに、〔IV〕工業化をエネルギーという観点からみるとどのようにみえるのか、〔V〕自動車(社会)を人々の心性からみるとどのようにみえるのか、という関連テーマから構成される。その意味では本書は体系だった論文集というよりは、テーマ化したものを寄せ集めたものであるといえよう。

以下、本書の内容を概観しよう。

〔I〕19世紀中頃までは、井戸、河川によって給水され、下水は地中にしみ込ませるか、河川などの水域に流すか、あるいは肥料として使われるかしていた。19世紀後半に大規模な給水、下水処理システムが導入され、こうした給水、下水処理の旧来のやり方が変更された。Romelspacherはこの問題に焦点をあてている。ドイツでも、下水施設の導入は河川の汚染、都市衛生への影響に関する是非とからんで1870年代に論議の対象となっていた。その結果1877年に、河川への都市下水の放流禁止措置が一時的に導入されたが、これで論議が終わったわけではない。放流された下水が薄まるということ、河川が浄化能力をもっているという考えが支配的で、結局1880年代後半には、無制限の下水放流が決定されることになった。下水は全く浄化されることなく河川に放流されることになったのである。

一方、給水面では、井戸に代わって中央給水システムが普及する。下水施設の導入と結びついて、河川は今や飲み水の供給と下水流路とい

う二重の役割を果たすことになった。たとえばルール地方の水の90%を利用して石炭・鉄鋼業は、水を無制限にルール川に放流し、ルール川は同時に飲み水として利用されていた。そのため飲み水は衛生上問題となったが、その解決策は、1) ザウアーランドのダム建設(1904年開始)、2) 運河の建設によって、ルール川ではなく直接ライン川に下水を流すことによってルール川の汚染に対処すること(1921年開始)であった。この例から明らかになる点は、新しい給水、下水処理システムによってその地域の衛生は確保されたが、水の汚染は基本的には解決されず、より広い範囲に拡大されたということである。水の汚染の局所的解決が水の汚染範囲の拡大という結果をもたらしたのである。その歴史的帰結がどのようなものであったのかは、水の汚染が今日至るところで問題をおこしていることによって明らかとなる。

こうした水の汚染と同じ構造は、大気汚染についても確認できる。Andersen/Brüggemeierは、今から約100年前の酸性雨をめぐる論議を分析している。製錬所近郊に発生した煤煙が大気汚染に対して作用したメカニズムが、当時かなり精確に研究されていた。しかし、被害が初期には地域に限定され、有害物質が可視的ではなかったということ、有害物質を無限の大気に希薄化することによって危険を防止しようという認識が支配的であったため、こうした研究はほとんど反響を呼ぶことはなかった。そのため、煤煙に対しては高い煙突を建てることによって対処することになった。それゆえ、直接の周辺部は被害はかなり減少したが、亜硫酸そのものは除去されることなく、また煙突から有害物質が広範囲に排出されることになったのである。

水や空気の汚染と異なり、土壌の環境史についてはほとんど研究がなされていない。Schrammによれば、下水設備の導入により、1900年頃からは排泄物は農業には利用されなくなった。代わって化学肥料が大量に導入されることになった。化学肥料によって土壌の栄養素が保

証されたが、土壌に生きる有機体が大幅に減少し、土壌の肥沃さが減退することになった。そしてそれを避けるためにさらに化学肥料が利用されるといふ悪循環が生じてしまったのである。また、1880年代に出現した無機質肥料（カリ塩とトーマス鉱滓粉）が植物ならびに土壌に対して及ぼす生態学的に望ましくない影響が1920年以來、問題となった。有害物質が薄められて、農業用地に利用されていった過程が明らかとなる。Schramm は農業用地のみならず、工場用地の下ないし周辺の土壌の環境汚染にも言及している。ここで重要なことは、補償金が支払われることによって、土壌は浄化されないまま放置され、土壌の生態学的機能が無視されたということである。

〔II〕本書の第二のテーマは、環境に関する議論ではしばしば無視されている労働環境の問題である。Machtan/Ott は、工業化の中心問題の一つである労働者の健康リスクと産業労働との関係を、社会・労働医学、社会保険制度の発展と関係させて分析している。19世紀の工場制度においては、労働と結びついた健康リスクは労働者の私的なリスクとみなされていた。それに対して、1870年頃、新しい世代の医師たちが「労働者の病氣」を特定しようとしたが、塵埃のような一定の物質の作用によるものとみなすことによって、労働環境との関係を自ら切断してしまったのである。

労働環境と健康に関する19世紀以降の制度の歴史においては、原因の克服ではなく、結果の精算が原則として貫かれた。労働環境の潜在的リスクをいかに除去するかという問題は、第一次大戦後も国家の労働環境対策の対象とはならなかったのである。

この Machtan/Ott の研究から明らかになる点は、19世紀の工業化の過程において、労働者にとっての直接的な労働環境の悪化に対しても、その原因を除去あるいは防止せずに結果を補償することによって対処する労働環境政策が貫かれたということであり、そして結果として労働

環境は悪化していったということである。こうした展開の背後に、自然＝環境が再生可能であり、人間が再生可能であるという観念を見出しえよう。

〔III〕 それでは自然＝環境の悪化に対して、人間主体の側ではどのような運動がおこなわれたのであろうか。それが本書の第三のテーマである。市民層の郷土色保存運動と社会主義的な自然愛好運動の二つが研究の対象となっている。

Andersen によれば、19世紀以降の市民層の自然保護に関する運動は郷土色保存運動であり、そこにおいては理想的な過去が賛美される一方、進行する工業化が批判されはしたものの、本来の敵は労働者とされた。技術的發展そのものは批判されず、自然＝環境は問題とされなかった。郷土色保存運動の自然概念は生態学的なものではなく、そこでは景観上の美しさが問題であった。こうした観点から出発した郷土色保存運動は、19世紀後半には保護区の保護に自己限定することになる。世紀転換期頃には、市民的郷土色保存運動はますます現実から離れていき、自然保護公園の設立、天然記念物の保護を要求するようになり、産業との妥協を求めていき、時代を経るにつれ、産業記念物の維持、さらにナチス時代になると、民族的色彩を持つようになっていく。

19世紀に問題とされた自然＝環境の生態的な破壊の進行に対し、市民層の郷土色保存運動はこのように何ら歯止めとはなりえなかったが、社会主義的な自然＝環境保護運動は自然＝環境の生態学的保護を追求したであろうか。そもそも社会主義的な自然＝環境保護運動は何を求め、労働者階級にどのような自然概念を提供したのであろうか。

社会主義的な自然＝環境保護運動はそもそも存在していなかった。あったとすれば自然愛好運動である。Zimmer は、1895年ウィーンで旅行協会として設立された「自然友の会」と名付けられた社会主義的な自然愛好運動を分析している。これは市民層の郷土色保存運動よりは闊

争的であったが、環境保護ではなく、「自然への自由な接近」を求めるものであった。

「自然友の会」は自然ロマン主義と社会民主主義の政治的目標との結合をねらいとしていたが、景観の私有化の経済的政治的原因を考察し、自然への無制限の接近を要求したのである。したがって、「自然友の会」の自然＝環境破壊に対する立場は、独自のファクターとして自然＝環境を捉えるのではなく、資本主義的利潤追求に対する批判に重点があった。

このように、社会主義的な自然愛好運動にも生態学的自然＝環境保護という認識が欠落していた。工業化と共に進行する自然＝環境破壊に対しては、市民層、労働者層を問わず運動としての自然＝環境保護運動はそもそも存在していなかった。市民層と労働者層の運動に活路を見出しえなかった本書の著者たちは、いったい何に「緑の党」的な自然＝環境保護運動の基礎エネルギーを求めようというのだろうか。

この問題への手掛かりは、先の Andersen/Brüggemeier の大気汚染に関する論文にみられる。1923年に勃発したフランスのルール占領に対する住民の消極的抵抗は、工場の操業停止にまで拡大した。それによって、煤煙に弱いジャガイモや穀物の収穫量が増えることになった。工場排ガスが有害物質の源泉であることが体験的に明らかになったが、ここで指摘したい点は、不自由な生活を強いられることになったルールの住民が自然＝環境の保護よりも生産の復活を望み、労働運動も経済成長をより重視し、結果として、再び大気は汚染されることになったということである。

とすれば、著者たちはオルターナティブな運動の萌芽をまったく見出しえなかったのであろうか。大気汚染の被害者が地域を越えて自分たちの経験を交換することもなく、被害者の運動は地域に限定されたままであった。工場誘致を阻止する試みも殆どが失敗に終わっていた。しかし、例外もあった。Andersen/Brüggemeier によれば、ハンブルク近郊の Schulau/Blanke-

nese での精鉛所建設計画である。別荘を持つハンブルクの上流階層の抗議によって計画は廃棄されることになった。

こうした状況にもかかわらず、Andersen/Brüggemeier は、将来に対して比較的明るい展望をもっている。過去の歴史においては、大気汚染の危険性を意識しているグループが限定されたものにとどまり、社会的拡がりをもたず、また、独自のファクターとして自然＝環境保護が重要な役割を果たしていなかったことを認めつつも、近年になって生じている、自然＝環境の破壊に対する危機感の高まり、自然＝環境の意識の変化に将来の展望をみているのである。〔IV〕とすれば、最近の反核・平和運動にみられるように、核エネルギーに対する危機意識は歴史研究においても明確化されているであろうか。ドイツの若い世代の歴史家たちは核エネルギーをどのように捉えているのだろうか。そこでこの問題をエネルギーを対象にした Siefert の論文に探ってみよう。Siefert は核エネルギー利用の変化をテーマに、工業化とエネルギー利用の関連を明らかにしている。石炭と石油という化石エネルギーの利用は工業化にとってきわめて重要であったが、化石エネルギーは太陽エネルギーにもとづくもので、限定された資源の消費を意味するにすぎず、これまでのエネルギー体系との断絶を意味するものではなかった。決定的な断絶は、核融合ないし核分裂によって、無限の永続的なエネルギー源が開拓されたことによって与えられた。

Siefert は、化石エネルギーの利用が二酸化炭素の排出による気候の変化という問題、核エネルギーがもつ放射能による危険性を指摘しつつも、核エネルギー反対の歴史学的根拠を呈示しているとはいえない。逆に、エネルギー利用の転換からみれば、核エネルギーの原理的新しさを強調することになってしまっているのである。

〔V〕以上、Sachs の論文を残して本書の論文を紹介してきた。歴史学方法論の観点からこれ

らの論文を総括すると、〈社会構造史〉対〈下からの社会史〉という対立図式はここでは明白には存在していない。自然＝環境，労働環境，自然＝環境保護運動の歴史を分析・叙述する仕方，社会構造史と何ら基本的な相違はみられないのである。それゆえ，研究方法のレベルで社会構造史と下からの社会史とのあいだに徒に相違をみつけようとするのはあまり生産的ではない。

その意味で，残る Sachs の論文は，社会構造史とは異なる，生態学的な心性史として自動車の問題に接近している。鉄道が人々を遠隔地と結びつけたが，時間的制約からは免れてはならず，それに対し，世紀転換期に熱狂的に利用されることになった自転車は，人々を近距離地と結びつけたが，人間の肉体を使うというところから進歩のシンボルとはならなかった。それに対し自動車の文化史的意義は，空間と時間に対する支配にあり，同時に，もともと特権のシンボルとして出現したことからも明らかなように，社会的秩序に対する支配にもあった。自動車は贅沢品であったのである。自動車は戦後1950年代の経済成長期に大衆化することになる。それによって自動車と旅行が結びつき，自動車での週末旅行と休暇旅行が流行する。

しかし自動車の文化史的意義はこれにとどまらない。自動車化の波はまもなくして自動車の渋滞をもたらしてしまう。この渋滞を解決するために，1962年以降1970年代末まで西ドイツで精力的に道路が建設された。しかし，心性史的観点からみれば，それ以降，自動車はもはや希望のシンボルではなくなってくる。進歩のシンボルとしての自動車への熱狂は，自動車の過剰

から生ずる不快に転化しうる。しかし他方では人々の自動車への希望は根強く存在する。そのなかで，自動車業界は「清潔な」自動車を宣伝し，きれいな環境の名のもとに新しい販売市場を開拓している。Sachs は皮肉にそれを次のように表現している。「環境悪化による損害が利潤と特権の源泉になる。」

このように，Sachs は自動車社会へ突き進む心性史的背景を明らかにし，一方，自動車が過剰になり，道路が渋滞することによって，時間と空間に対する支配の逆転の過程を突きつけることによって，自動車社会に対する人々の意識変革をメッセージとして投げかけている。

総じて本書は，自然＝環境の歴史をテーマに設定した点に新味があるが，歴史学方法論のうえでは Sachs の論文を除いては，従来の社会構造史と根本的に異なるものではない。しかし全体として本書の基調は，現代に生きる人々に対して，自然＝環境の破壊の歴史を呈示することによって，自然＝環境に対する意識変革こそが求められているということをメッセージとして投げかけているのである。

1988年初春，「ヨーロッパにおける環境の歴史」の第一回国際シンポジウムが，旧西ドイツの Bad Homburg で開催された。その場で環境史研究のためのヨーロッパ作業部会が結成された。自然＝環境の歴史に関する歴史研究はいま始まったばかりであり，今後の研究の成果が大いに期待される。ひるがえって，わが国の研究状況はいかなる展望があるのだろうか。

矢野久

(経済学部助教授)